**「イエスの弟子になる条件とは」**

**年間第23主日・C年（16.9.4）「被造物を大切にする世界祈願日」**

　ただ今、わたくしが朗読した今日の福音ですが、冒頭でいきなり**「父、母、妻、子ども、兄弟、姉妹を、さらに自分の命であろうと、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」**確かに、ルカ福音のなかでは、最も厳しいおことばと言えましょう。

　それでは、イエスご自身は、私たち一人にそして私たちの共同体に一体何をおっしゃりたいのか、そのを、ご一緒に探って行きましょう。

　まず、初めにイエスの時代の文化的環境においては、独特の話し方（セミティズム）がありましたので、その特徴を踏まえておきましょう。たとえば、「憎む」という言い方は、「・・・の次に置く」あるいは「二番目にする」という意味になります。

　ですから、大切な肉親を**「憎まないなら」**という言い回しは、文字通り「憎む」ことを、わたしたちに求めておられるのではありません。つまり、イエスに従うことを最優先させるならば、当然のことながら、大切な肉親への愛は相対化つまり二の次にしなさいということではないでしょうか。

　たとえば、子どもが、イエスに生涯かけて従うために洗礼を受けたいと親に願った場合、親は快く子どもの願いを受け入れなさいと言うことです。

　もしかすると、子どもの洗礼が、まさに親離れだけでなく、特に子離れの絶好のチャンスになるかも知れません。

　以前、寝たきりの母親が、小学生の高学年の息子さんを修学旅行に送り出すときの心境を話してくれました。**「今までは、息子はいつもわたしの目の届く守備範囲にいました。けれども、この修学旅行によって、遠くに行ってしまい、しかも泊りがけで出かけるので、息子を全面的に神さまに預ける決心をしました。」**と。

**十字架を背負ってついて行く**

ちなみに、今日の箇所のマタイ福音の並行箇所では、次のようになっております。

　**「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。」（マタイ10.37-38）**

確かに、マタイは、その言い方をかなりソフトにしております。

とにかく、このマタイによれば、十字架を担うためには、イエスに従うことを最優先しなければならないと言うのではないでしょうか。つまり、十字架を背負うことは、まさにイエスに従うことにほかなりません。

　ちなみに、マタイ福音には、次のようなエピソードが語られております。

　**「そのとき、ゼベダイの息子たちの母が、その息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。イエスが、『何か望みか』と言われると、彼女は言った。『王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください。』イエスはお答えになった。『あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことが出来るか。』二人が、『できます』と言うと、イエスは言われた。『確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。…』(**

**同上20.20-23b）**

ここで言われている**「杯」**は、十字架上で流されるイエスの血になる最後の晩餐でのブドウ酒の杯を思い起こさせますが、ゲッセマネでの苦しみに悶える祈りにあるように、死に至るほどの苦しみのシンボルと言えましよう。

　ですから、**「自分の十字架」**とは、イエスの弟子になるためにはイエスと同じ道を歩む覚悟を示していることにほかなりません。

　ちなみに、この**「自分の十字架」**を背負うということは、マタイ福音では、ペトロがイエスに対して弟子たちを代表して見事な信仰告白をした直後、イエスが初めてご自分の受難と復活の予告をなさった文脈で語られております。

　つまり、ペトロが、まず、あからさまに次のような反応を示したというのであります。

　**「『主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。』イエスは振り向いてペトロに言われた。『サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。』それから、弟子たちに言われた。『わたしについて来たい者は、自分を無にし、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。・・・』」（同上16.22b-24）**

ですから、イエスに従うためには、どうしても自分を無にし、自分の人間的な思いを捨てて、御心に徹底して従うことがどうしても必要なのであります。

**腰をすえて考える**

ところで、今日の福音の後半では、塔の建設と、戦いのたとえをもちいて、キリスト者に必要な心得について語られています。

　つまり、キリスト者の行動パターンの特徴は、その真剣さと徹底性にあると言うことではないでしょうか。実は、すでに旧約時代から、神との関係の真剣さと徹底性は、次のような重要な掟によって強調されておりました。

**「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。**

**わたしが命じるこれらのことばを心に留め、子どもたちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝るときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。」（申命記6.4-7）**

今でも、敬虔なユダヤ教徒は、この掟を毎日唱えていると聞いております。

　とにかく、キリスト者の歩む道は、全身全霊を込めて、日々、イエスに忠実に聞き従う生き方にほかなりません。

　それは、安易な道に流されやすい本能に逆らって生きることと言えましょう。ですから、この世の富への執着を、潔く断ち切ることも必要になって来ます。

　ちなみに、今日は、教皇フランシスコによって新たに定められた「被造物を大切にする世界祈願日」に当たります。教皇は、すでにその回勅『ラウダート・シ：共に暮らす家を大切に』で次のように呼びかけておられます。

　**「キリスト教の霊性は、生活の質についての特別な理解を示し、消費への執着から解放された自由を深く味わうことができるのです。・・・それは『より少ないことは、より豊かなこと』いう確信です。事実、新たな消費がひっきりなしに氾濫し続けることが、心を惑わし、一つ一つの物事や、一瞬一瞬の時を大切にできなくしてしまします。・・・キリスト教の霊性は、節度ある成長とわずかなもので満たされることを提言しています。」（222項）**

今週もまた、日々自分の十字架を背負い主に忠実に聞き従うことが出来るように共に祈りましょう。